

論 説

労働生産過程論の埋没とその影響

安 田 均

(人文社会科学部教授)

はじめに

われわれは、今日の多様化した労働、典型的な製造労働ばかりでなく、調整労働などのような間接労働、あるいは何らかの評価に基づく能力主義賃金が適用される労働、さらに家庭内における消費に伴う家事、ケア労働を理論的に把捉するには、従来、表裏一体的に理解された価値形成労働概念と生産的労働概念の峻別が重要であることを説いてきた(安田[20016a])。

その検討過程でわかったことは、従来の諸研究では、生産過程における生産的労働の措定、あるいはそもそも労働過程の生産過程としての捉え返しが、形式に流れ、十分説明されていないということであった(同:53-77)。『資本論』に従って冒頭商品論で価値実体の抽出を終えている場合はもちろんのこと、宇野弘蔵に従い、価値実体である抽象的人間労働の場を資本の生産過程論に移している論者も、生産物観点からの労働過程の生産過程としての捉え返しによる、生産的労働(と「労働の二重性」)の設定をあたかも労働の定義であるかのように説明もなく叙述していた。「生産過程論の形骸化ないし埋没」である。

しかも、「生産過程論の形骸化」は最近のテキストほど進んでいる。例えば、大谷[2001]では、『資本論』冒頭商品論における抽象的人間労働抽出、いわゆる蒸留法を批判することもなく、序論において、生産過程と生産的労働の規定を与えただけで、抽象的人間労働を抽出している。また、小幡[2009](以下、小幡原論)では、小幡[1995]では設けられていた生産過程という節項目が消え、生産的労働も形式的な定義に止まっている¹⁾。

本稿では、生産過程の構造と理論的意義を確認した後に、小幡原論の労働過程論(生産論第1章労働章「1.1労働過程」)を取り上げ、生産過程という視点が確立しないまま、「労働の同質性」が抽出されていることを確認する。そのうえで、生産過程論の埋没、「労働の同質性」の形式的設定が、多様な労働の理論的把捉を妨げているだけでなく、労働章における生産力視点の埋没、生産章における剰余のマクロ的処理に帰結していることを明らかにする。

¹⁾小幡[1995]では、生産過程は、労働過程、環境・生産・労働と構成する3節の筆頭を占めていたが、小幡原論の生産論第1章労働では、労働過程節のみ残り、生産過程は項としてすら立てられていない。

I 生産過程論の構造と役割

まず生産過程論とはどういうものか確認しておこう。

1. 労働生産過程とその規定

ここでいう生産過程とは、人間の自然との間の物質代謝過程である労働過程を目的である生産物視点で捉え返したものである。マルクスは『資本論』第1部第5章「労働過程と価値増殖過程」冒頭にて、「使用価値または財貨の生産は、それが資本家のために資本家の監督のもとで行なわれることによって、その一般的な性質を変えるものではない。それゆえ、労働過程はまず第一にどんな特定の社会的形態にもかかわりなく考察されなければならないのである」（K.I.S.192、以下『資本論』第1部からの引用はドイツ版全集の頁数をS.192等と記す）として、労働および労働過程を次のように規定している。

労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材にたいして彼自身一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために、彼の肉体にそなわる自然力、腕や脚、頭や手を動かす。人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然〔天性〕を変化させる。…蜘蛛は、織匠の作業にも似た作業をするし、蜜蜂はその蟻房の構造によって多くの人間の建築師を赤面させる。しかし、もともと、最悪の建築師でさえ最良の蜜蜂にまさっているというのは、建築師は蟻房を蟻で築く前にすでに頭のなかで築いているからである。…

労働過程の単純な諸契機は、合目的な活動または労働そのものとその対象とその手段である。

人間のために最初から食料や完成生活手段を用意している土地（経済的には水もそれに含まれる）は、人間の手を加えることなしに、人間労働の一般的な対象として存在する。労働によってただ大地との直接的な結びつきから引き離されるだけの物は、すべて、天然に存在する労働対象である。…これに反して、労働対象がそれ自体すでにいわば過去の労働によって潤過されているならば、われわれはそれを原料と呼ぶ。…

労働手段とは、労働者によって彼と労働対象とのあいだに入れられてこの対象への彼の働きかけの導体として彼のために役だつ物またはいろいろな物の複合体である。労働者は、いろいろな物の機械的、物理的、化学的な性質を利用して、それらのものを、彼の目的に応じて、ほかのいろいろな物にたいする力手段として作用させる。労働者が直接に支配する対象は（…）労働対象ではなく、労働手段である（S.192-194）。

その後、労働手段、労働手段を生産手段に、労働そのものを生産的労働として捉え返す叙述が現れる。

この（労働過程の—引用者）全過程をその結果である生産物の立場から見れば、2つのもの、労働手段と労働対象とは生産手段として現われ、労働そのものは生産的労働として現われる（S.196）。

この箇所によつて、労働過程と生産過程との峻別を強調したのが宇野弘蔵である。宇野

は、マルクスが『資本論』冒頭商品論で2商品の交換関係から抽象的人間労働を価値実体として抽出した点を批判し、価値実体抽出の場を資本の生産過程に移すことを提唱した²⁾。宇野は自らの『経済原論』では以下のように生産過程を規定している(第二編生産論第1章「資本の生産過程」[一 労働=生産過程])。

労働過程において、人間は自己の労働力をもって労働手段を通して労働対象物に、一定の目的に従った変化を与えて、自然物を特定の使用価値として獲得するのであるが、労働のかかる生産物はもはや労働過程とは離れた1つの物としてあらわれる。自然物と同様の外界の対象物をなすわけである。ただそれは生産せられたる対象物である。そしてこの生産物の見地からすると、労働対象も労働手段も共に生産手段とせられ、労働もまた生産的労働としてあらわれ、労働過程は同時に生産過程となる(宇野[1950, 52]: 88)。

宇野が、『資本論』冒頭商品論での抽出に異を唱えた抽象的人間労働、「労働の同質性」もこの生産的労働および生産的労働規定を基に与えられた。

例えば10斤の綿花と1台の紡績機械とをもって……6時間の労働によって10斤の綿糸が生産されたとすると、10斤の綿糸は6時間の紡績労働の結果に外ならない。…しかしこの10斤の綿糸は単に人間の労働6時間の生産物とはいえない。綿糸の生産に生産手段として役立つ綿花、機械の生産にも労働を要している。仮に10斤の綿花に20時間の労働を要し、機械の生産にも幾時間かを要するものとして、この紡績労働過程中に消費される部分が4時間分の労働生産物に相当するとすれば、生産手段自身にすでに24時間の労働を必要としていることになる。そこで綿糸10斤は、単に6時間の労働の生産物ではなく、24時間の過去の労働に6時間の紡績過程の労働を加えた30時間の労働の生産物である。／この紡績過程で行われる労働は、かくして二重の性質を持っている。……すなわち一面では綿花を綿糸に生産する具体的なマルクスのいわゆる有用労働としてであり、他面では24時間の労働生産物たる生産手段に、新たに6時間の労働を加え、10斤の綿糸の生産に必要な労働30時間の一部を構成するものとしてである。後者は、前者の具体的な有用労働に対して抽象的人間労働ということが出来る(同:88-89)。

宇野は、価値実体の抽出の場を資本の生産過程論に求めながら、実際に「労働の二重性」を導出したのは、資本の、と限定される以前の普遍的な生産過程論であることには留意を要する。

2. 生産過程論の骨子

²⁾宇野[1962]は、その根拠として、商品交換は2商品の物々交換ではなく、貨幣を介した交換に他ならず、その貨幣価格の価値からの乖離も資本による生産把握によって調節可能となったように、価値実体の抽出も資本の生産過程を背後に置く必要があること。また、商品論において2商品の交換関係から直ちに価値実体として抽象的人間労働を抽出しているために、価値の実現が保証されているかのような展開となり、商品所有者が価値の実現を求めて私的行動を繰り返す結果として貨幣、資本等の流通形態が展開される関係の解明はむしろ阻害されること、の2点を挙げている。

3つの骨子 上に示した生産過程論の論理構造を整理すると以下の3点に分かれる(安田[2016b]:61-62)。

- [A] 生産過程とは、人間の自然との間の物質代謝過程である労働過程を、結果である生産物の視点から捉え返したものである。
- [B] 結果としての生産物視点、すなわち目的視点からすると、労働対象と労働手段は共に生産手段に一括できると同時に、人間の主体性を表現していた「労働そのもの」も生産的労働として位置づけられる。
- [C] ある生産物の生産に要する生産的労働と生産手段の有機的連関において、人間労働の具体的有用労働の側面と抽象的人間労働の側面、すなわち「労働の二重性」を認めることができる。

しかし、価値実体ないし「労働の二重性」を資本の生産過程論で措定する宇野の創意を引き続く論者の間でもこの3点は十分認識されてはいなかった(安田[2016b]第1章2(5))。宇野後継者の多く³⁾は、[B]生産的労働の説明を欠いたまま、あるいは生産過程間連関の考察を欠いたまま、論点[A]からあたかも労働の定義であるかのように[C]「労働の二重性」を規定していた。すなわち、労働過程を生産物視点から生産過程として捉え返すと宣言しただけで、生産手段は労働対象と労働手段の総称、生産的労働は労働そのものの言い換えの如き規定で済まされ、「労働の二重性」が宣言されていた。一言で言えば、論点[B]が埋没していたのである。

過程の手段化 もちろん生産過程は労働過程の言い換えではない。労働過程は、人間もその一部である自然との物質代謝過程において過程の主体性は人間労働の方にあることを表わしている。人間が労働手段を用いて労働対象に働きかけ、獲得した生産物を摂取して、自分自身も生きながらえる物質代謝にあつて、労働対象が働きかけの純然たる対象、客体であるのに対して、「労働者が直接に支配する」労働手段は、いわば人間の手の延長であり、どちらかという主体寄り、人間寄りの位置付けである。

しかし、そのような労働過程も「結果である生産物の立場から見れば」、生産物を産み出す過程にすぎず、労働対象と労働手段は選ぶところなく生産手段と一括される。同時に、労働そのものもはやその主体性が問題にされることなく、生産のための労働、生産的労働と捉え返される。つまり、目的視点とは過程の手段化であり、生産手段、生産的労働は手段視された客体、主体なのである。

3. 生産過程論の意義

³⁾ 鈴木鴻一郎編[1960]、伊藤誠[1989]、鎌倉孝夫[1996]等。

労働力商品を生産手段と捉え返すとき、最も顕著な外見上の変化は、横の視点、相互の連関が浮かび上がっていることである⁴⁾。

合目的編成と同質性・定量性 結果としての生産物視点では、諸生産過程の合目的編成が追及され、定量性が発生することは安田[2017]で詳しく説いた。すなわち、生産物生産のためにはさまざまな生産過程が絡み合い、それぞれの過程で様々な生産手段、生産的労働が投入される。一定量の生産物を生産するという目的視点からは、それに適した生産手段の質と量が選択、追及される⁵⁾。

労働そのものも目的視点および効率視点から適切な質と量の生産的労働として投入され、その時代・社会の技術水準を前提に量的安定性、定量性が確保される。生産過程論で抽出される「労働の同質性」はこの定量性をベースにしている。マルクスが『資本論』冒頭商品章において2商品の交換関係が抽出した「人間の生理学的力能の支出」(K.I.S.61)としての抽象的人間労働とは異なり、すべての人間労働に妥当するわけではない。例えば、消費に伴って家庭内で家人によって担われる労働の一部は、効率性よりも消費主体の充足を優先し、手段性が弱く、定量性が見込めない労働のため、不生産的労働と位置づけられる。

量的拡大への志向 生産物を所与とする生産手段、生産的労働の効率的編成が追求される局面では、余剰の発生が明らかとなる。目的とされる生産物の生産に必要な労働量を超えた部分は自分たちの生活充実に投入が可能という面もある。もちろん、個々の労働は具体的有用労働としては必ずしも生活資料の生産に係わるとも、直接生産に携わるとも限らない。しかし、労働の同質的側面、抽象的人間労働としての側面が確認されるならば、一労働日に必要労働と剰余労働の別が認められ、剰余労働拡大の誘因が確認できる。

実際、宇野旧『原論』の、抽象的人間労働を抽出した「B生産過程における労働の二重性」に続く「C生産的労働の社会的規定」では、同質的な労働における量的区分、必要労働と剰余労働の区分と後者の拡大、生産力の発展が説かれる。さらに、第1章「資本の生産過程」全体に視野を広げると、「一 労働＝生産過程」における抽象的人間労働の抽出と必要労働・剰余労働の分割を承けて、「二 価値形成＝増殖過程」「三 資本家的生産方法の発展」と、価値と労働の関係、剰余価値の発生と増進が説かれるている。

4) 大内力[1981]:229, 山口[1985]:85。

5) 「要するに、ある使用価値が原料か労働手段か生産物かのうちのどれとして現われるかは、まったくただ、それが労働過程で行なう特定の機能、それがそこで占める位置によるのであって、この位置が変わればかの諸規定も変わるのである。／それだから、生産物は、生産手段として新たな労働過程にはいることによって、生産物という性格を失うのである。それは、ただ生きている労働の対象的要因として機能するだけである。紡織工は、紡錘を、ただ自分が紡ぐための手段としてのみ取り扱い、亜麻を、ただ自分が紡ぐ対象としての取り扱う」(S.197)。

剰余価値形成と結びつくことにより生産力志向が一層強まるわけであるが、その起点は生産過程における「労働の同質性」の抽出にあることは、敢えて生産過程を労働過程と区別して規定した宇野自身がつとに指摘したところである。

人間が自然に対してはたきかけるときに、労働というのが他の生物と違うのだという点は労働過程の説明でなされる。ところがいろいろなものを生産するという点は生産過程でしょう。生産物の点からいって生産力の問題にもなるわけだ。何時間か働いてこれだけのものをつくるということは、生産物の観点からいった労働過程で、ほくかなりの区別をつけている（宇野編[1967b]:226）。

以上、生産過程論の課題は、生産諸過程が目的物視点から効率的に編成されることにより、労働の定量性、同質性が確保されることを明らかにすると同時に、剰余労働拡大への生産力視点を築くことにあった。

Ⅱ 小幡労働過程論の構造

小幡原論では、生産過程はどのような考察がなされているだろうか。

小幡原論の生産論は、労働、生産、再生産の3章構成から成る。後に述べるように、小幡原論では生産は過程全体の収支を基準に規定された集計概念であるため、生産章は社会的な生産構造が考察され⁶⁾、労働の個別投入、労働過程や労働組織は、第1章労働章で考察されている。

労働章冒頭節「1.1労働過程」の構成は、自然過程、目的意識的過程、生産と労働、労働力、労働の同質性、過程としての労働、他人のための労働の7項から成っている。その内容は大概すると、3つに分かれる。

1. 生産と労働の設定

第1-3項(自然過程、目的意識的過程、生産と労働)では、生産(と消費)をひとまず労働とは無関係に過程の量的結果を基準に規定したうえで、人間固有の目的意識的な活動を労働、非目的意識的活動を非労働を規定する。

小幡が労働に先行して生産を規定した意図は労働の生産からの峻別にある。従来の労働概念が生産における労働に偏っていた、という理解からである。

⁶⁾生産章は、まず「社会的再生産」(2.1のタイトル)が枠組みであることが説明された後に、「2.2純生産物と剰余生産物」「2.3価値増殖過程」と剰余の解明に進んでいる。

通常、労働の結果が生産であるというように、両者は表裏一体をなすと見なされている。だが、厳密に考えてみると、労働のない生産もあるし、生産でない労働もある。…市場に取りこまれてゆく今日の多様なすがたの労働を理解するには、労働の概念をもっと深化させておく必要がある（小幡[2009]:99）。製造過程における機械化・省力化の急激な進展のもとで、商業・金融などの市場活動やそれに随伴する運輸・通信といったサービスにますます多くの人間活動が吸収される傾向にある。と同時に、これまで市場とは異なる原理に依存してきた人間の心身に直接関連する、教育・医療や育児・介護などのさまざまな活動も他者の活動を通じて社会的に維持されるようになってきている。そしてこのような活動の場の推移とともに、その内容も大きな変化を遂げつつある。それに対して、従来の労働概念をそのまま当てはめようとすれば、そこからはずれた側面ばかりが目につくのは当然のことであろう。…旧来の労働概念を固定してそれと異なる活動が増大したという方向に考えを進めるよりは、むしろ労働概念のほうを再開発するほうが、変容しつつある人間活動を包括的に理解する捷徑であるように思われる（小幡[1995]:2）。

そのために小幡が行なったことは、人間の主体的行為・労働の規定に先行して、生産・消費をモノとモノの反応過程、自然過程として規定することである。もちろん、生産・消費は人間が行なう。しかし、それはあくまで自然法則に踏まえた行動とされている。

主体を取り囲むモノの層で、いちばん基底を構成していたのは、「自然的属性」であった（図 I.1.1—略）。モノは他のモノと自然的属性のレベルで関連をもち、互いに反応し変化する。ここでは自然科学によって解明される自然法則が支配している。主体はこのような法則を認識し、モノどうしの間に一定の因果関係をみいだすのである。／主体はさまざまな外的な世界の複雑な反応を、(1)特定の出発点とその帰結に分割し（過程の認識）、(2)原因と結果が対応した繰り返しとして（法則性の認識）理解する。…このようにして理解された、モノとモノとの反応を自然過程とよぶ（小幡[2009]:101、引用中の強調は原著者。以下同様）。

そのうえで、自然におけるモノとモノとの反応を過程認識した自然過程の量的結果に着目して生産と消費が規定される。

自然過程において、始点を構成するモノのセットを投入、終点となるモノを産出という。投入と産出を比較して、増大している場合を生産とよび、減少している場合を消費とよぶ。…これまでのところで、生産と消費がモノの増減に関わる概念であることはわかる（同:102）。

他方、身体としては他の動物と同じモノの反応過程という側面を有していても、欲求を意識的に客観化・対象化する点、目的意識的活動である点に人間労働の特徴を認めている。

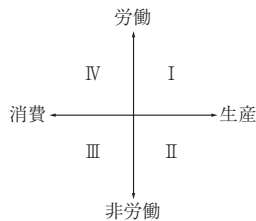
動物のカラダはモノの反応過程という性格をもち、人間もこの面を共有している。しかし、人間の活動には他の動物にみられない特徴がある。…人間は何を欲しているかを意識し、対象として自覚する。…欲求は目的として客観化され、その目的を実現することで満たされる。／このように目的を設定し、それを意識的に追求し達成することを、目的意識的とか、合目的的とかいう。…目的意識的な活動は、直接的な欲求から距離のある手段を生みだす場合に強く求められる。不測の事態に備えて食料を備蓄する場合には、直接的な欲求なしに将来の状況を想像して活動する。こうした場合に活性化する、人間に特有な目的意識的な活動を労働とよぶ（同:102-103）。

これに対して、目的意識性の乏しい活動は非労働と規定される。

生産の対は消費であり、労働の対は休息や遊びのような、非労働と一括するほかない不定型な活動である。論理的には、両者は図Ⅱ.1.1のような直交関係にある。…非労働はマイナスの労働量などと誤解しないでほしい。「労働の結果が生産である」というのは、その一象限をなすにすぎない（小幡 [2009] : 104）。

相互に独立した生産・消費と労働・非労働の2要因をそれぞれ軸にして生産労働の直交関係を示す四象限図(図Ⅱ.1.1)が示され、今日の多様な労働の理論的位置づけが試みられる。生産と労働は直接には依存関係にも補完関係にもないため、「労働による消費」(第Ⅳ象限)ばかりか、労働が投下されない「非労働による生産」(第Ⅱ象限),「非労働による消費」(第Ⅲ象限)も設定されている。

図1：小幡の生産労働直交図（小幡[2009]:104, 図Ⅱ.1.1）



2. 「労働の同質性」の抽出

第4,5項(労働力, 労働の同質性)では、モノに働きかける労働力の構造を、意識と身体に分け、目的意識は特定の内容に限定されないことから、「労働の同質性」が導出される。

目的意識的な活動としての労働は、所定の目的に向けて、さまざまな変化を制御してゆく。労働のコアは、自然過程に対するコントロールにある。コントロールの直接的な対象は、自分の身体である。／ポイントは、「制御するもの」と「制御されるもの」が分離されることにある。ここでは両者を、それぞれ意識と身体というよぶ。…労働が商品として資本の運動に組み込まれる仕組みを明らかにするためには、ひとまず、意識はいきなり外部の世界に作用するのではなく、まず身体の制御を介して、間接的に外部の対象に作用することさえ明らかになればよい。この内的に閉じた最小の制御ユニットが労働力である(同:106)。

制御する側の意識は、自律性をもつ。それは外部から制御されることなく、特定の目的の実現のために、さまざまな指令を出し続けることができる。…意識は、同じ身体を異なる目的にあわせて制御することができる。労働力はこの汎用性において、他のモノでは代替しがたい特性を発揮する。目的意識的というのは、言い換えれば、汎用的な多目的性のことである。／労働力という、エネルギーのようにイメージされ、熱量のような同質性を考えるかもしれないが、これは正しくない。労働力はたしかに同質性をもつが、それは汎用性もち変幻自在に変化するために同質なのである。(略)

目的意識的 = 汎用性 = 同質性

という同値関係が成り立つ(同:106-107)。

3. 過程間連関への視点

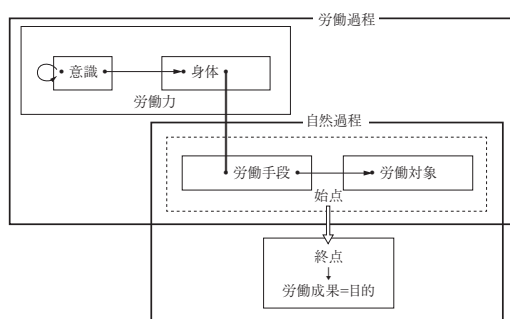
最後の2項(過程としての労働, 他人のための労働)では, 意識と身体を備える労働が「目的に即して」具体的に編成される過程として「労働過程」が規定され, 労働が具体的な作業を実現する機構が労働力, 労働手段, 労働対象に分けて示される。

外界におけるモノの反応が, 自然過程として捉えられる以上, これにはたらきかける労働も持続性をもった過程となる。この過程において, 身体の直接的作用は多様なかたちで現象するが, それらは主体の意識によって統合されている。汎用的な労働力は, さまざまな作業を切り替え, 組み換えながら支出される。分節化された諸作業が一つの目的に沿って有機的に結合されたまとまりを労働過程とよぶ。自然過程が, 単独の始点と終点で構成されているのに対して, 労働過程はそれらを組合せ調整する複合的な性格をもつ。労働過程で主体は, (は)たらきかけるモノに対して, さまざまなモノを手段として使用する。前者は労働対象, 後者は労働手段とよばれる(同:107)。

さらに, 目的意識性の分節化の一面として, 目的の伝授が「他人のための労働」として規定されている。

労働概念のコアに位置する意識は, 最終目的を主体の直接的欲求に基づいて設定するだけではない。他人によって逐一指図されなくても労働を継続できるのは, 意識が自律性をもつからであるが, 自律的に追求される目的自体を, 意識は外部から受け取ることもできる。直接的欲求と切り離して, 目的そのものを意識的に追求できるという労働の特性は, 他人との関係において強く現れる。その意味で, 相手の意図を理解するコミュニケーション能力は, 労働に欠かせない。(1)自然過程を分節化して制御する能力

図2：小幡の労働過程の構造図 (小幡[2009]:108, 図Ⅱ.1.3)



と, (2)直接的欲求という刺激なしに, 中間目的を独立に追求できる能力とが結びつくことで, 労働力には他人の目的を自分の目的として引き受けて自主的に遂行できるという独自の特性が生じる。このような目的の受容は, 他人の構想内容を直接聞き取り, それを主体的に追求するというかたちで実現されるだけではない。目的となる完成品を示して, これと同じモノをつくれと命じるというかたちでも可能である。さらに, 労働の内容を具体的に特定するためには, 労働手段や労働対象を与え, このなかで労働力を支出させるというかたちもある(同:109)。

以上みてきた労働章「1.1労働過程」の展開を、その骨格に絞ってまとめると、生産を量的な自然過程として押さえたうえで、人間の労働力の属性を検討して「労働の同質性」を導出し、最後に労働過程および過程間の連関、事実上の生産過程を説いていることになろう。「労働の同質性」抽出の場としての労働生産過程論の後退、形骸化である。

Ⅲ 労働生産過程論埋没とその影響

1. 生産過程論埋没の内実

以上みてきた小幡原論労働章の冒頭節「1.1労働過程」では、生産過程論は如何に展開されているだろうか。先に確認した生産過程論の3つの骨子に照らして確認してみよう。

[A]生産物視点の欠如 労働過程を「その結果である生産物の立場から見れば」と生産物視点から捉え返す生産過程論の必要性はどこにも説かれていない。もちろん、生産過程という表現も用いられているが、特別な規定もなく日常用語法に従っているに過ぎない⁷⁾。

そもそも小幡は、労働の生産から分断という観点を打ち出した小幡[1995]の時点で、労働過程の生産過程としての捉え返しに否定的であった。例えば、労働過程を生産過程として捉え返す宇野の試みを「抽象的人間労働の規定を合目的な活動という人間労働の本質にさかのぼって与えようとする重要な試みとして評価しなくてはならない」と評価しつつも、他方では「労働と生産との関連に関していうと、マルクス以上に両者を同じ過程の表裏の関係として位置づける結果になっている」（同:18,注13）と批判していた。

[B]生産的労働の未確立 最終第7項「他人のための労働」の、「直接的欲求と切り離して、目的そのものを意識的に追求できるという労働の特性は、他人との関係において強く現れる。…労働力には他人の目的を自分の目的として引き受けて自主的に遂行できるという独自の特性が生じる」（小幡[2009]:109）という件からは、ある生産物の生産という共通の目的のために、さまざまな労働がそれぞれ最適の量で投入されること、生産的労働の有機的連関が想定できる。

しかし、第6項「過程としての労働」で規定された労働対象と労働手段がそのまま用いられ、

⁷⁾例えば、生産過程という用語は序論や流通論でも、「市場に商品を流し込む生産過程」(小幡[2009]:17)や「生産過程の流過程化」(いわゆる商人資本が商品を安く仕入れるために生産者に生産手段を安く提供すること、同:91)のように特に規定もなく用いられている。労働章第2節「1.2労働組織」では、生産様式を定義する際に、生産に着目した「歴史的な諸社会を区別する」概念、「個々の生産過程の編成という狭義の用法に対する広義の用法である」(同:110)という表現を用いている。

合目的な生産手段としては捉え返されていないし⁸⁾、労働も、合目的な生産的労働として捉え返されてはいない。生産的労働は遂に確立されないままであった⁹⁾。

[C]「労働の同質性」抽出 他方、生産過程論の目的である「労働の同質性」の抽出は果たされている。もちろん、宇野が示したような、[A]労働過程の生産物視点からの捉え返しを宣言し、[B]労働対象・労働手段を生産手段と、また労働そのものを生産的労働と手段的に捉え返したうえで、[C]ある生産物を作るための生産手段と生産的労働の有機的連関のなかに「労働の同質性」が抽出されたわけではない。むしろ[A][B]には関係なく、労働の属性である目的意識性から汎用性、そして同質性と、三段論法的に導き出されたのである。

宇野継承者の多くが、[B]過程の手段視による生産手段、生産的労働の設定をスキップし、[A]労働過程の生産物視点での捉え返し→[C]労働の同質性抽出と直結させていたことと対置すれば、小幡原論は、[A][B]両手続きを欠いたまま、また第7項の過程間連関の考察に先行して、第5項で[C]「労働の同質性」抽出を行なっている。

2. 生産過程論埋没の原因

なぜ小幡原論では、[A]労働過程の生産物視点での捉え返しや、[B]過程の手段視による生産手段、生産的労働の設定が企図されなかったのであろうか。また、逆に[A][B]を欠きながら、[C]「労働の同質性」を抽出できたのはなぜであろうか。

a) 前社会的な生産観

根本的な原因は、労働と生産の分断にある。

IIで紹介したように、小幡[1995][2009]は、従来の労働概念が生産と表裏一体関係に置かれていたとの認識から、労働規定に先立って、生産を計量可能なモノとモノとの反応過程として、自然過程として規定している。生産は人間の主体的行為に左右されないという意味では前社会的な概念なのである。生産労働直交図の第II象限「非労働による生産」が示すように、生産は

⁸⁾ また、生産手段も序論や流通論で用いられているが、生産過程同様、常識的な用法に止まり、特別の規定は与えられていない。例えば、いわゆる原蓄に関連して「農地や道具などの生産手段をもたず、もっぱら雇用され賃金で生活する労働者をプロレタリアートという」(同:3)とか、先の「流過程の生産過程化」に関連して「原材料や生産手段をすべて買い揃え、労働者に賃金を支払って生産させるという方式」(同:90)と。また、「1.2労働組織」には、協業に関連して「生産手段の共有」という項目もあるが(同:116)、その意味内容は特段規定されているわけではない。

⁹⁾ 小幡[1995]が労働者間のコミュニケーションを含むが故に量的に不確定的な「労働そのもの」と定量的な生産的労働との区別を積極的に説いていたものの、小幡原論では生産的労働について特別の規定を与えなくなった。例えば、「生産過程でおこなわれる労働を生産的労働という。『生産的労働』という用語は、何をもって『生産的』というかで拡張され多義化する。この規定は、例えば『価値を生み出す労働』といった狭義の規定もあるが、本書では『生産にたずさわる労働』という意味に限る」(同:148)と。

労働がなくしても成立しうる。これは、生産および生産に投じられる労働の量的安定性が、人間の主体的活動とは無関係に設定されていることを意味する。

そもそも社会的再生産という把握のためには、〈過程〉という概念がその基礎として与えられる必要がある。…この場合、最低限必要となるのは、そこに人間主体による逐次的な統御の介入を要するにせよ、投入と産出との間に計量可能な安定的な関係が存在するということである。出発点となる状況とそれに続く状況との間に、たとえ原因と結果として定性的に捉えうる関係がみられても、それだけでは生産という概念を構成するための基礎としては充分ではない。そこには明瞭な量的規定関係が存在しなくてはならないのである。そして、基本的には客観的な自然法則によって支配される〈モノとモノとの反応過程〉のうちには、その複雑さのために人間主体によって完全には認識できないにせよ、ともかくある幅で統御可能な安定的な関係が潜んでいるといえる。生産という概念の定立にとって、投入と産出との間に定量性を見えたいいくつかの過程の抽出が基礎的条件となるのである（小幡[1995]:7）。

生産あるいは生産に係わる労働の量的安定性が人間の主体的行為、労働を俟たずに確定している以上¹⁰⁾、ある生産物を産み出すための、さまざまな人間労働が合目的、効率的に編成する側面、生産的労働および生産手段の有機的編成が課題に上らないのは当然であろう。

b) 受動的な主体観

上と表裏一体の関係にあるのが、人間労働の主体性の限定とそれによる労働過程論の形骸化である。

労働過程は、『資本論』以来、人間も自然に働きかけて生産物を得ることにより自身が再生する物質代謝にあって、人間が主体的に係わる過程として理解されてきた。他の動物がこの生産・消費を含む物質代謝に対し本能的に係わっているのに対して、人間はこの物質代謝過程にも主体的に係わっているものであり、その主体的行為こそ労働であった。

ところが、小幡原論における労働は何かを得る過程という位置づけが弱い。第6項「過程としての労働」に先立って、労働はまず「目的意識的過程」（第2項タイトル）と規定されており、その力点は、モノの生産と消費（による物質代謝）にではなく、欲求を客観化・対象化し追求する意識の方に置かれていた。図Ⅱ.1.3が示すように、意識が身体を動かし、労働手段を用いて労働対象に働きかけるまでが労働過程であり、成果である生産物は、人間の行為とは独立に安定的な自然過程に属する。客観的に進行しているモノとモノの反応現象に対して自然法則に従って受動的に係わる行為、リアクションが労働であった¹¹⁾。

物質代謝は人間主体で進行しているという認識があってこそ、所期の結果を得るためには、

¹⁰⁾ 小幡には、生産の定量性が目的意識的な労働によって担保されていることを認める叙述（小幡[1995]:11, 小幡[2009]:148）もみられるものの、理論の枠組みとしては、生産は、人間の主体的行為、労働に関わりなく、量的に確定可能という認識が根底にある。安田[2017]:113注8参照のこと。

¹¹⁾ 「マルクスの基本的な考えは、統御するという自由はあるが、しかしそれは統御される側にはたらく自然法則を抽出しているにすぎないということなのであろう」（小幡[1995]:8）。

労働過程を結果である生産物視点で客体視して捉え返す必要があった。しかし、客観的現象に寄り添うだけの受動的な行為をことさら生産物の視点から捉え直すという発想は生起すべくもなかったのである。

c) 目的意識性二義混同

第7項「他人のための労働」において、労働相互の連関が曲がりなりにも考察されながら、過程の手段視が生起しなかったもう1つの原因は労働の目的意識性のもつ2つの意味が十分意識されていなかったからであろう。

山口[1985]が指摘するように、人間労働の主体性を表わす目的意識性には、人間も物質代謝過程のなかにあるといっても、目的は人間が設定しているという意味と、一旦設定された目的に合わせて行動を制御するという意味、行動の合目的制御の2つがある¹²⁾。例えば、資本の下での労働は、第1の意味の主体性が抑えられているものの、人間労働である以上、第2の意味の主体性まで失われるわけではない。

先に引用した「…労働力には他人の目的を自分の目的として引き受けて自主的に遂行できるという独自の特性が生じる」(小幡[2009]:109)という件では、労働者が自身の設定とは限らない目的の下に労働することが思い描かれている。この場合の「他人の目的」こそ「結果としての生産物」であり、生産物視点から労働過程を捉え返しせば、すなわち生産過程となる。

しかし、小幡原論では目的意識性に2面あることが意識されていない。そのため、第1の意味の目的設定性を強調する第6項「過程としての労働」の延長線上に第7項「他人のための労働」が展開され、所与の目的=生産物視点での過程の手段化、すなわち生産手段、生産的労働の合目的・効率的編成の検討が行なわれなかったのである。

以上、小幡原論では、一方で前社会的な生産観と受動的な主体観があり、また他方で労働における目的意識性の2つの意味の混同が与って、特定の目的=生産物という視点から労働過程を手段化する生産過程論が打ち出されなかったのである。

にもかかわらず、小幡原論で「労働の同質性」が抽出できたのは、それが労働の属性から演繹されたにすぎなかったからである。つまり、思考上の手続きに過ぎないからこそ、宇野以来の生産過程の設定([A][B]両手続き)を経なくても「労働の同質性」が設定可能だったのである。

¹²⁾「ここで主体的ということの意味は二つある。一つは、人間の場合は人間自身がその様々に変化する欲望に応じて労働の目的ないし内容を措定するという意味である。もう一つは、あらかじめ措定され、表象されている労働の目的ないし内容を実現するために、自らを制御し、目的意識的に行動するという意味である。クモや蜜蜂がいかに精巧な作業をしようと、人間の労働と他の動物の本能的な、あるいは生得的ないわゆる定形行動とはこの二点で相違する」(山口[1985]:82)。

3. その影響

以上みてきた労働生産過程論の埋没—労働過程論の形骸化、生産過程論の未確立—は経済原論の展開、資本主義経済の理解にどのような影響を与えるのだろうか。小幡原論に止まらない問題として考えてみたい。

a) 多様な労働の把握困難

直接の影響は、当初の目的、生産的労働に限定されない多様な人間活動の理論的把握がかえって困難になっていることである。既に安田[2016b]でも触れているのでここでは簡潔に述べる。

生産的労働・不生産的労働の無区別 まず、過程のポジションに着目した生産と消費規定は、消費における労働を生産におけるそれと質的に異なるものとして設定することを困難にしている。同じ活動でも、過程のポジション次第で生産とも消費とも位置づけられるからである¹³⁾。

また、生産の量的安定性は自然過程レベルで設定済みであるため、生産(消費)に係わる労働はすべからく定量性を満たすものとなり、過程が手段化され、定量性の高い生産的労働と、消費に伴い家庭内で主に家人に担われる労働の一部のように、消費主体の充足を主とし、手段性が弱く、定量性も弱い不生産的労働との区別ができなくなっている。実際、小幡原論では生産的労働概念は形骸化している(注9)参照)。そもそも過程の収支を基準にした生産・消費規定自体が量的に安定しやすい生産寄りの発想であろう。

生産的労働と価値形成労働の混同 抽象的人間労働が、「労働の同質性」を表わすものとして、労働の属性から演繹されている点は、『資本論』が冒頭商品論において2商品の交換関係から価値の実体を「生理学的意味での人間の労働力の支出¹⁴⁾」に求めているのと同じ困難を抱えている。つまり、抽象的人間労働という属性はすべての労働に妥当することになり、価値形成労働の生産的労働との区別を設定できない。例えば、ある生産物の生産に要する労働は、その時代・

¹³⁾ そのため、小幡原論では非労働概念に生産的労働概念の相対化を求めた。しかし、労働の対概念として非目的意識的活動と位置づけられているため、どのような活動にも適用しにくくなっている。実際、生産労働直交図(図Ⅱ.1.1)のうち、典型的な生産的労働「労働による生産」(第Ⅰ象限)以外はほとんど納得のいく例を出せていない。まず「非労働による消費」(第Ⅲ象限)については説明も例示もされていない。また、「非労働による生産」(第Ⅱ象限)の例として挙げられているオートメーション(小幡[2009]:312)は人間の活動を介在させない無活動を意味するから、非労働の挙証にはならない。さらに、「労働による消費」(第Ⅳ象限)も家事労働や商業労働を例として挙げているが、説明はされていない(同上)。

¹⁴⁾ 「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成するのである。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間の労働力の支出であって、この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を生産するのである」(S.61)。

社会の技術的水準に規定され、量的安定性を有している。しかし、価格変動の重心をなす価値形成労働にそれとは異なる。価格変動に重心があるということは、需要超過に対して追加供給が可能ということであるから、単純労働が条件となる。また、労働の投入主体が、商品の使用価値にではなく、価値増殖に関心がある資本である場合、労働投入量は効率性原則によってギリギリまで締め上げられており、先の定量性を超えて、成果との間に量的技術的確定性を有している。つまり「抽象的人間労働というのは、広義と狭義の意味がある」（山口[1995]:116）¹⁵⁾。しかし、労働一般の属性から導き出された抽象的人間労働ではその区別ができない。

b) 生産力視点の欠落

量的拡大への志向性欠如 I 末尾で確認したように、生産過程論の設定には、諸生産過程が目的物視点から効率的に編成されることにより、労働の定量性、同質性が確保されることを明らかにすると同時に、剰余労働拡大への生産力視点を築くという理論的意義があった。

しかし、小幡原論の労働章には生産力視点が認められない。その事情は『資本論』と似通っている面がある。

『資本論』も構成上は第3篇「絶対的剰余価値の生産」冒頭の第5章「労働過程と価値増殖過程」において投下労働に即した価値増殖が確認された後に、協業、分業、機械制大工業を説く第4篇「相対的剰余価値の生産」が続いている。しかしながら、子細にみると、抽象的人間労働と商品価値の同定が冒頭商品章で済まされているために、労働過程はあくまで使用価値の考察に限定され¹⁶⁾、第5章における生産過程、特に生産的労働の考察が、生産力拡大や剰余価値増大には直接繋がっていないという問題を抱えていた¹⁷⁾。

小幡原論の「1.1労働過程」でも、第5項で労働の属性から抽象的人間労働が抽出されているために、第6,7項の労働過程や過程間連関の考察は、生産手段、生産的労働の効率的編成という視点を打ち出せず、生産性向上による剰余労働の拡大、さらに剰余価値形成を動因とした生産力の一層の発展には結びついていない。

労働組織論への移行の論理 もちろん小幡原論でも次節「1.2労働組織」で協業、分業、機械制大工業を取り上げている。しかし、それらは、開口部の一つとしての労働組織の多態性設定という意図に発し、また「1.1労働過程」との関連では、労働の特徴である目的意識性の共有という視点から展開されているのであり、生産力視点からではない。

¹⁵⁾ 抽象的人間労働の二重性については安田[2016b]:87-92を参照のこと。

¹⁶⁾ 「商品そのものが使用価値と価値との統一であるように、商品の生産過程も労働過程と価値形成過程との統一でなければならないのである」(S. 201)。

¹⁷⁾ 安田[2016b]:50-58参照。

すなわち、労働の属性、目的意識性から、一方で欲求の対象化・客体化と目的を共有するためのコミュニケーションの発達、他方で目的と手段の分離、手段の階層化が導かれ、「両効果は…(1)協業と(2)分業という労働組織の座標軸をきめる」(小幡[2009]:103)と次節との繋がりが説明されている。このうち、分業には目的から分離した手段の階層化=深化という意味では生産力視点を読み取れなくもないが、協業には生産力視点は認められない。仮に生産力視点があれば、労働ないし労働組織の多型性が成立したとしても、安定的か、生産性の低い方は淘汰されないかという問題が生じるであろう。生産力視点がないために、協業、分業は労働の目的を共有する文字通りの労働組織論に止まっている¹⁸⁾。

c) 剰余論のマクロ化

労働・生産のミクロ・マクロ分断 労働章では、生産力視点が欠けているばかりか、剰余拡大の視点も認められない。その理由の一端は、上に述べたように、予め「労働の同質性」が労働の属性から演繹されているために、生産過程の効率的編成という視点が生じなかったことにあるが、そればかりではない。生産、消費が人間の主体的活動、労働とは無関係に過程の収支を基準にして規定されているため、剰余労働の拡大、剰余価値の増産はマクロ的にしか説けない構造になっている。個別の生産過程をみたのでは剰余が生じたか否か判断できないというスタンスなのである。実際に、剰余労働の発生や剰余価値の形成は、社会的再生産を扱う第2章生産で取り上げられている(注6)参照)。

剰余価値視点の欠如 剰余視点の欠如は労働ないし資本主義的労働の考察を決定的に制約する。すなわち、労働章では剰余価値増進という視点が欠落しているため、「1.2労働組織」「1.3賃金制度」は単に労務管理的観点での考察に止まっている。もちろん、「2.3資本主義的労働組織」では「労働力の商品化」も説かれているし、「1.3賃金制度」は事実上、資本の下の賃金労働に限定されている¹⁹⁾。しかし、それらは、剰余価値増進という観点ではなく、言い換えれば資本主義的な変形を帯びたものではなく、労務管理一般の問題になっている。

しかし、労働章では資本の価値増殖活動は触れられず、逆に生産章では剰余や剰余価値増進に触れていても、マクロ的視点でしか説けないとすれば、流通論でせつかく流通主体の無規律な私的行動とその産み出す機構を分析したことが活かせないであろう。すなわち、社会的生産に無関心な資本が主体になることによって、生産過程がいかに変質していくかを明らかにでき

¹⁸⁾ 小幡原論の協業・分業論については稿を改めて検討したい。

¹⁹⁾ 「『賃金』には、もともと、賃貸借に対する『賃料』という意味があり、労働に対する賃料が労働賃金すなわち労賃となる。しかし、ここでは賃金という用語を、通例通り、労働力商品の価格という意味で使ってゆく」(小幡[2009]:133)。

るのが労働生産過程論であり、したがって剰余価値の生産も、個別の資本の労働力の投入に即して解明される必要がある。剰余の存在や剰余価値形成は、単なる富の偏在という意味での階級問題で済みますわけにはゆかないのである。

むすび

本稿では、生産過程論埋没という視点で小幡原論の労働章、特にその労働過程論を検討した。その結果、小幡の場合、宇野継承者のように、生産過程論が形式に流れていたわけではなかった。むしろその前提としての労働過程論が、客観的に存在する自然過程に対し、意識のうえで選んだ目的物を自然法則に従って取得するだけの受動的過程として形骸化すると同時に、それを目的である生産物の観点から捉え返した、生産手段および生産的労働の有機的連関の考察、生産過程論はついで確立されなかった。

また、その影響も、生産的労働と不生産的労働の無区別、生産的労働と価値形成労働の混同に止まらなかった。同質的な労働を前提にした労働の量的拡大、生産力視点や剰余増大の視点が労働章では打ち出せなくなっていた。そのため、過程の収支に着目した生産・消費規定と相俟って、協業、分業は生産力の問題ではなく、単なる労働組織の問題として扱われるに止まり、労働組織や賃金制度は、剰余価値増進という観点からではなく、純粹に労務管理的視点での考察に止まることになった。

労働過程および生産過程の設定は、「労働の同質性」抽出に止まらない理論的意義を有することが再確認されたのである。

参考文献

(本文中の引用頁数は雑誌論文が書籍に収められた場合には後者の頁数を指している)

伊藤誠 [1989] 『資本主義経済の理論』 岩波書店。

宇野弘蔵 [1950, 52] 『経済原論』 岩波書店。

——— [1962] 『経済学方法論』 東京大学出版会。

——— [1973] 『資本論』 五十年・下』 法政大学出版局。

宇野弘蔵編 [1967a] 『新訂経済原論』(現代経済学演習講座) 青林書院新社。

——— [1967b] 『資本論研究第Ⅱ巻』 筑摩書房。

大内力 [1981] 『経済学原論(上)』(大内力経済学大系第2巻), 東京大学出版会。

大谷禎之介 [2001] 『図解社会経済学』 桜井書店。

小幡道昭 [1995] 「生産と労働」 『経済学論集』(東京大学) 第61巻第3号。

—— [2009] 『経済原論』 東京大学出版会。

鎌倉孝夫 [1996] 『資本主義の経済理論』 有斐閣。

鈴木鴻一郎編 [1960] 『経済学原理論（上）』 東京大学出版会。

安田均 [2016a] 「生産的労働と生産過程論の再構成」『経済学の座標軸—馬渡尚憲先生追悼論文集』 第3章, 社会評論社。

—— [2016b] 『生産的労働概念の再検討』 社会評論社。

—— [2017] 「生産的労働概念とその活用」『山形大学人文学部研究年報』 14。

山口重克 [1985] 『経済原論講義』 東京大学出版会。

—— [1995] 「抽象的人間労働と価値法則」『情況』 第55号(後に山口[1996]第1部第6章)。

—— [1996] 『価値論・方法論の諸問題』 御茶の水書房。

Marx, K. [1867], *Das Kapital*, I, II, III, in *Marx-Engels Werke*, Bd.23-25, 1962-64 (岡崎次郎訳『資本論』 大月書店, 1958-65年).

Disregard for labor production process and its consequences

YASUDA Hitoshi

(Yamagata University)

In my previous studies, I have argued that setting productive labor in the production process is essential for our theoretical understanding of diversified labor. In this paper, after reviewing the structure and theoretical significance of production process, I critically examine Obata's theory of labor process to conclude that it unjustifiably extracts "homogeneity of labor" without establishing the viewpoint of production process. With that in mind, it is further clarified that his disregard for production process, on which his formulation of "homogeneity of labor" is based, not only hinders our theoretical understanding of diversified labor but also results in both his negligence of production viewpoint in the chapter on labor and his macro treatment of surplus in the chapter on production.